様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　９ 月　９ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：奨励研究
研究期間：2020～2020
課題番号：２０Ｈ０１１４８

研究課題名　　生徒が主体的に考え表現する学びの創造～プロジェクト型学習で展開する柔道単元～

研究代表者
佐藤　吉高（Sato, Yoshitaka）

お茶の水女子大学・附属中学校・教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　430,000円

研究成果の概要：　本研究では、中学校保健体育の武道領域において、プロジェクト型の柔道単元を開発・実践し、効果の検証を行った。本研究では、既存の技の獲得を主目的とせず、生徒が授業で得た知識・技能を主体的に統合し発信する学びを目指し、「受け身の形」の創作を核とした演武プレゼンテーションを創り、柔道の魅力について表現する授業を開発・実践した。
実践の結果、検証授業が、生徒のもつ「技能や能力」を重視する認識を「知識や魅力、コミュニケーション」を重視する認識へと変容させることに寄与したこと、教師への関わりを重視していなかった苦手意識のある生徒の認識を変容させることに寄与したことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現在、世界の教育の潮流はコンテンツ・ベイスからコンピテンシー・ベイスへと移行し、日本の教育においても知識・技能を獲得する学びから思考・探究を追究する学びへの転換が求められている。中学校武道領域においては、既存の技の獲得が授業の目的となっていること、武道の本質を問わず形だけの礼法習得や道徳的規範を教材とする現状があることを有山らが指摘している。保健体育科武道領域におけるプロジェクト型の授業を開発研究することは、教えられたことを身につける獲得型の学びから生徒自身が学びの意味を見出していく生成型の学びへの授業転換を促すことにつながると共に、これからの体育授業の在り方を検討していく上で意義がある。

研究分野：保健体育科教育学　体育学　教育学

キーワード：プロジェクト型学習　柔道　パフォーマンス課題　保健体育科教育　中学校　武道

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究の目的

平成 29 年告示の学習指導要領の改訂ポイントとして「知識・理解の質を高め資質・能力を育む『主体的・対話的で深い学び』」が強調されている点があげられる。学習指導要領では、この学びのために全ての教科等を三つの柱で再整理をし、アクティブ・ラーニングの視点から学習過程の改善を推奨している。生徒が知識や技能を一方向的に教授され、習得するだけの学びではなく、身につけた知識や技能を活用し、考え、表現しながら各教科の本質（見方・考え方）について深く学ぶことが求められている。この学びの実現に向けて研究代表者が着目したのが、「パフォーマンス評価（課題）」である。教師が一方向的に教え、生徒がそれに従う授業や活動あって学びなしの体育の授業がいまだ散見される保健体育科教育において複数の知識やスキルを統合して使いこなす力を評価するパフォーマンス評価（課題）を保健体育のカリキュラムの中でどのように活用すべきかを明らかにすることは、『主体的・対話的で深い学び』を促進することにつながる。

本研究ではテーマを「生徒が主体的に考え、表現する学びの創造～プロジェクト型学習で展開する柔道単元～」とし、「教え込み」に陥りやすい柔道領域においてパフォーマンス課題を活用したプロジェクト型学習の授業開発を行い、その効果を検証することを目的とする。

２．研究成果

（１）開発した柔道単元について

本研究で開発した柔道単元では、既習事項や授業での学びをもとに知識やスキルを統合して発揮する演武会を、生徒が実践提案する授業を設計することとした。中心として扱う題材を、ソーシャルディスタンスを保って行う「受け身の形」の創作とし、礼法・進退動作と組み合わせながら演武プレゼンテーションを創る活動を通して、柔道という運動文化を理解し、柔道（武道）の魅力を発信する学習を目指した。

【設定した本質的な問いとステップ】

本質的な問い	柔道という運動文化のもつ魅力は何か 人を投げる、抑えることで何を学ぶか
核となる課題とステップ	【パフォーマンス課題】 「柔道の魅力を発信する演武会を実演しよう」 1. 様々な受け身を通して崩し、理合いを考える 2. 柔道の形を味わう 3. 演武の形、プレゼンテーションを創作・実演する

【単元計画と授業テーマ】

時	授業テーマ
1	オリエンテーション
2	柔道の作法に含まれる「文化性」を味わおう
3	柔よく剛を制す～「崩し」を追究しよう～
4	「受けの形」の創作に向けて多様な受け身を身につけよう
5	受けがスムーズに受け身をとれる「崩し」を探究しよう
6	実戦に近い形で受け身をとろう～よりスムーズに勢いよく～
7	形」から学ぶ柔道の魅力～形の基本を味わい創作へつなげよう～
8～10	オリジナルの「形」を創作しよう
11	演武会のリハーサルをしよう
12	演武会本番

（２）体育学習観尺度・体育学習方略尺度による分析

本研究では、小野ら（2017）の作成した「中学生用体育学習観尺度」と「中学生用学習方略尺度」を用いて、検証授業前後の生徒の学習に対する認識の変容を分析した。この尺度を用いた分析に関しては、質問項目の回答を「よくあてはまる＝4 点」「あてはまる＝3 点」「少しあてはまる＝2 点」「全然あてはまらない＝1 点」として得点化し、SPSS ver.27 を用いてすべての質問項目に対して、運動が得意と回答した群と運動が苦手と回答した群の平均値に t 検定を行い、単元前後の結果について分析した。

検証授業前の学習観尺度の結果を見ると、「運動技術の習得」、「身体能力の向上」の項目について得意群が有意に高い差が認められた。また、学習方略尺度では、「楽しさの創出」、「挑戦的な取り組み」、「公正な取り組み」、「教師への関わり」、「思考・判断」の項目において、有意な差が認められた。

検証授業後に再度同様の尺度調査を行ったところ、学習観尺度においては、得意群、苦手群に有意な差は認められなかった。学習方略尺度においては、「学習規律の重視」、「楽しさの創出」、「挑戦的な取り組み」、「公正な取り組み」、「思考・判断」の項目に有意な差が認められた。

これらの結果から考察すると、検証授業前には、苦手群に比べて「運動技術の習得」、「身体能力の向上」の項目を重視する得意群の学習観が、検証授業を通して「知識の習得」、「魅力の感受」、「コミュニケーション能力の涵養」を重視する学習観へと変容したことが伺える。また、検証授業前には得意群と比べて教師への関わりをあまり重視しない苦手群の学習認識が、検証授業を通して教師への関わりを重視する認識へと変容したことが伺える。総括すると、本研究で開発したプロジェクト型柔道単元は、生徒の「技能や能力」を重視する認識から「知識や魅力、コミュニケーション」を重視する認識への変容を促す。また、苦手意識のある生徒がもつ教師への関わりの認識を深めることを促すと結論付けることができる。

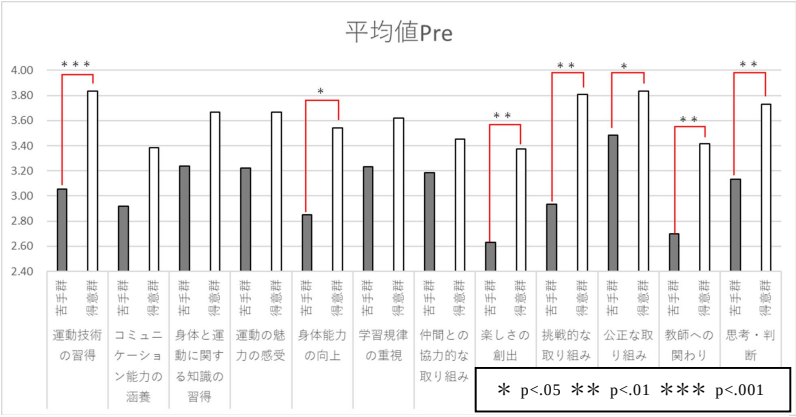


図１　体育学習観尺度・学習方略尺度の平均値 Pre

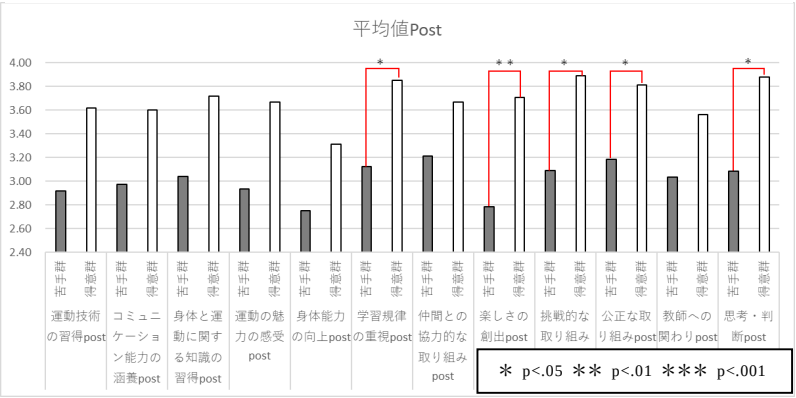
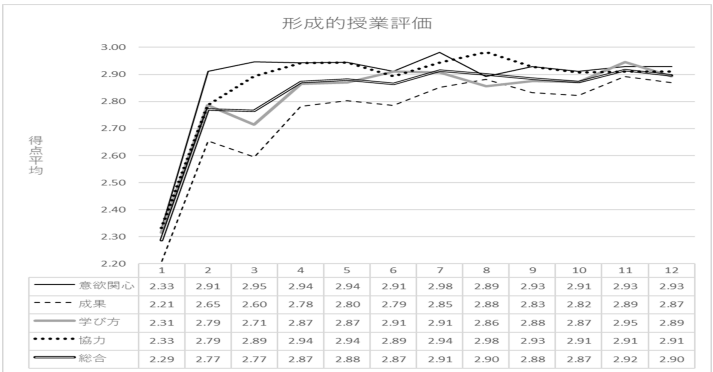


図２　体育学習観尺度・学習方略尺度の平均値 Post

（３）形成的授業評価による分析

本研究では、高橋ら（2003）が示す形成的授業評価を用いて、生徒が本実践をどのように受け止めたかについて分析を行った。この授業評価を用いた分析では、「意欲・関心」「成果」「学び方」「協力」の四つの次元に関する質問項目に対して「はい＝3 点」「どちらともいえない＝2 点」「いいえ＝1 点」で得点化し、毎時間の平均値の推移から分析を行った。



	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
意欲関心	2.33	2.91	2.95	2.94	2.94	2.91	2.98	2.89	2.93	2.91	2.93	2.93
成果	2.21	2.65	2.60	2.78	2.80	2.79	2.85	2.88	2.83	2.82	2.89	2.87
学び方	2.31	2.79	2.71	2.87	2.87	2.91	2.91	2.86	2.88	2.87	2.95	2.89
協力	2.33	2.79	2.89	2.94	2.94	2.89	2.94	2.98	2.93	2.91	2.91	2.91
総合	2.29	2.77	2.77	2.87	2.88	2.87	2.91	2.90	2.88	2.87	2.92	2.90

図 3 形成的授業評価の推移

平均得点推移をみると、1 時のオリエンテーションを除くすべての単元において、4 つの次元とも高い水準で推移している。その中でも単元序盤では他の次元よりも低い得点を示していた「成果」の次元が、単元の進行と共に他の次元と同水準まで上がっている傾向が見られた。これらの結果から、本実践のプロジェクト型学習のように特定の技能の習得のみを目的としないオープンエンドな学びでも、生徒は意欲をもって学習に取り組み、その成果を実感しながら学びを深めることができたと結論付けられる。

３．主な発表論文等

〔学会発表〕（計　1　件）

日本体育・スポーツ・健康学会 第 71 回大会

〔その他〕

体育授業研究会　一般実践研究発表会　口頭発表　（2021 年 2 月 23 日）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 佐藤吉高
２．発表標題 生徒が主体的に考え表現する学びの創造～プロジェクト型学習で展開する柔道単元～
３．学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会 第71回大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

体育授業研究会　一般実践研究発表会　口頭発表　（2021年2月23日）

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名